

桜アメ。  
時々、  
雨。

著者  
橋本 昂祈





# 目次

桜の飴。 . . . . .	1
色とりどりの飴。 . . . . .	2
幼き日の回想 . . . . .	4
ミント味の飴ちゃん。 . . . . .	6
精神世界、現実世界 . . . . .	7
子供なのか、大人なのか。 . . . . .	9
春物語 . . . . .	11
春物語 . . . . .	13
～ダウンロードありがとうございます！ ～BABY&さくら様 . . . . .	15
奥付	
奥付 . . . . .	18



桜の飴。

『桜あめ、どうぞ。』

春らしい言葉に安心しきった表情を浮かべる少年。

少年が現実的な夢を語りだすと、

文学少女は一時の安らぎを得る。

『非』日常の世界を体験したら、

イマジネーションの海へダイブ。

ユートピア的な世界観を持つ、

少年はリアルに夢を見ている。

しかし、

多くの矛盾を感じながら、

心では自問自答を繰り返す。

『桜あめ、、、要らない。』

少年は精一杯の強がりを言ってみた。

弱い心をひた隠しにして生きているのだ。

心が震えるたびに溢れ出る涙の味ならば、

一生分味わったのだから涙も枯れ果てた。

文学少女は優しく問う。

『あめは好きじゃないのかな??』と少年に問う。

## 色とりどりの飴。

色とりどりの甘い飴玉が入ったカンカン。

幼心に、『ワクワク』を覚えた日の事。

僕は飴玉の入ったカンカンを手にして、

それを思い切り振ってみた。すると、

カンカンの中で飴玉が踊っているイメージが湧き、

今すぐにも飴玉を取り出して食べたい！ と思った。

僕はカンカンのフタを開けようと、

大人のマネをして手で開けようとした。

いくら力を入れても全然空く気配もないしなあ～。

(僕じゃあけられないのかな??) と諦めムード。

大人たちはニコニコして観ているけれども、

(僕でもあけられる方法をしってるのかな?)

『あかないよ??』

覚えてたの言葉を言ってみる。すると、

『定規を使ってごらん!』と父は言う。

おばあちゃんの家はモノサシがいっぱいある。

長いものさし、短いものさし、中くらいのものさし。

たくさんあってどれを使えばいいの?? と悩み、

『どれ～??』と僕は言った。

『全部試してみたらいいさ。』



## 幼き日の回想

自分の背よりもおおきなものさしに魅かれ、

これを使うことにしたのだが、、

おおきすぎてダメだし、みじかいものさしを手にした。

父はビール瓶を開けるようなしぐさをして『こんな感じ』と言う。

『温めてみたら??』とおばあちゃんが言うので、

コタツでカンカンを温めてものさしでチャレンジ。

(このカンカンは誰にもあけられない) と、

『あけてください。』と、すなおにおねがいをした。

～筋肉モリモリの父が迫真の演技で開けられない事をアピール。～

～母もニコニコしてチャレンジ。あかない。おばあちゃんもあけられない。～

『おおきいおばあちゃんにあけてもらいなさい。』と父は言う。

(だれにもあけられないや。このカンカン。)

ねたきりのおおきいおばあちゃんにカンカンを渡す。

なんとびっくり!! ちからがなさそうなおおきいおばあちゃん。

いともかんたんに～ぽこっ。～とあけてしまったからびっくり。

『食べ過ぎちゃだめだよ?? 一日3粒。今日は寝る前だから一粒ね。』

(まほう?? このおばあちゃんはまほうのてをもってる。)

～うん。～とうなずき、飴玉をもらうとうれしくてうれしくて。

おおきなおばあちゃんのまわりを、

なんかいも、なんかいも、ぐるぐるとはしってまわった。

～少年は幼き日の自分を鮮明に思い出す。～

ミント味の飴ちゃん。

白いミントの味の飴が苦手だった。

白の飴がでるたびに『ハズレ』だと思っていた。

白の飴を避けて、『黄色』『桃色』『桜色』

最後には白い飴玉だけがカンカンに残った。

(食べられないし。。。)と、わがままなクセ。

(食わず嫌い。わがままなクセに。。。)

少年はさっきからずっと空想にふけている様子で、

文学少女は直観的に多くを感じとっているようなのだ。

『桜アメ、、、 きれい??』

文学少女は不思議そうな顔してシンプルに聞く。

少年は(好きだけどさ)と、複雑な心境でいる。

好きなクセに。(キライ)なふりして、大人のふりを。

大人のフリして、(キライ)をなくすオセロゲーム。

モノクロの世界では、白か？ 黒か？ のつまらない物語。

## 精神世界、現実世界

少年は、しばらくの間、眼を閉じて自分自身の感情と必死に向きあっている。

文学少女との出逢いの意味やこれまでの出来事の意味を繋げようとしている

時間にすれば、たった3分位の出来事だろう。

けれど、少年にはその3分間が、永遠にも感じられているようである。

眼に見える全てが、夢の中の出来事のように思えて、

天国と地獄が心の中を彷徨っている。

少年は、再び眼を閉じた。

その時、

(アタマの中でシュミレーションするクセに。)

と、少年を陰で嘲笑う悪魔の音が脳裏をかすめていった。

意識が朦朧とする中、

まさに陰が極まって、死にたいという誰かの叫び声が襲ってくる。

少年が人を信じる心を失いかけた瞬間。

(幸せのシュミレーションなら得意でしょう?)

と、天使のように無邪気に笑い飛ばしていく声が聞こえた。

少年は、ぱっと眼を見開いた。

金色のショートヘア。

黒のモード系スタイルが印象的な女性が椅子に座っている。

何事もなかったかのように、ただ、微笑んでコーヒーを飲んでいる。

テレビのスクリーンには映画マトリックスが映し出されている。

確か、精神世界と現実世界の存在をテーマにした映画だったろうか。

『目覚めた？ コーヒー飲むでしょ？』

女性は少年に声をかける。

高級フランスレストランで観るようなお洒落な場面が発生している。

(ああこれは現実だ。)

異質な空間こそが文学少女というイメージを勝手に植え付けてしまったのだ。

手紙を頼りに、僕は文学少女に逢いにきてしまった。

外には高級外車が止まっている。犬もいる。

お話ししたことや手紙に書かれていたことは全て事実だったのだ。

子供なのか、大人なのか。

文学少女が自分と共にすごしている時間、

彼女にとって幸せなことなのかどうかもよく解らない。

お互いの人生がうまくいくように、

お互いがお互いのことを祈っていることは確かなようだ。

時に、文学少女は極端な性質を持つ少年の運命に引っ張られ、

叫びたいくらい！ 幸せな瞬間も、倒れるほどの孤独も経験したはずだった。

極端な性質を理解した上で、励ましの声をかけ続けた。

自問自答の日々の中で、

『自分を大切に生きて』

ただ、それだけでいいんだと文学少女は教えてくれた。

今、少年の目の前に広がるのはフランス映画のような現実。

眼を閉じた瞬間や波動が下がった瞬間に沸き起こるスピリチャルな世界。

そして、現実社会から隔離された異質な空間があるというバーチャルのような現実。

大人なのか、子供なのか、良く解らないし、

白なのか、黒なのか、好きか嫌いすらも曖昧とした世界観。

『あのさ。桜?? アメ??』

『うん。』

『ひとつ、もらえるかなあ??』

## 春物語

少し照れくさそうに、手で口を隠しながら少年は文学少女に言った。

要らないって言った、自分が恥ずかしくて、

少年はハニかむような笑みを浮かべた。

『良かった！ 最後の2粒。私とキミで半分こ。らっき〜だね☆』

文学少女は謎めいたお話が大好きで、

謎だらけの少年と仲良くなりたかっただけ。

閉ざした心に効く魔法の言葉。

『シンプルでいいんじゃない??』

『好きなら好きでGO!! だよ。』

単純明快だけど、、、

本当にその通りだ!!

(オセロはもうヤメタ。自分には正直でいたい。)

現実から隔離された異質な空間の中で、

人々は何を感じ、何を悩み、どんな未来を夢みただろうか？

桜のアメ一つ。

たった一人の人の言葉が暖かく胸に刺さる。



楽しむこと。忘れていませんか??

## 春物語

心豊かな人がくれる手紙は

いつも『お元気ですか?』で始まる。

お互いの学びが終わった時、

心にも思っていない酷い言葉を投げかけて突き放す。

けれど、一人になった時、誰にもみられぬように泣いていた。

最後は、静寂に包まれ凜として美しい夜が訪れる。

PS お身体だけはお大事に。

PS の PS またお会いできる日を楽しみに祈っています。

～季節はめぐり。何度目かの春。～

雨。に振られた春もある。

アメ。を貰った春もある。

ほんの些細な言葉あそび。

『サクラ。あめ。飴。さくらあめ。雨。』

『桜アメ。時々、雨。』

優しくてほんのり甘いさくらの味。

ピリリと塩気が舌を刺激した。

桜の風まとい、香りの園にて

目を閉じれば一瞬で蘇る

『僕だけの春物語。』

～ダウンロードありがとうございます！ ～BABY&さくら様



奥付



## 奥付

桜アメ。時々、雨。

<https://puboo.jp/book/97049>

著者：橋本 昂祈

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/aki0827/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/97049>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/97049>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ

---

桜アメ。時々、雨。

---

著 橋本 昂祈

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---